1 「的」の定義を正確に捉えて協議会で意見を言っている若い先生を見て感心しました。私は「的」が導入された１年目か２年目に協議会に参加したので、updateできず違和感はそのまま残っています。そういう立場からの感想です。

２ 前提が間違っている？

本時の学習課題として、よく目にするのは「○○の気持ちを考えよう。」などといった一般化されたものである。 p7

今時、こんな緩い本時の課題で授業をすることがあるのでしょうか。
「太一はなぜもりを打たなかったのか」や「太造じいさんは何を見た時に心がガラッと動いたのでしょう」などの「気持ちを考えよう」よりは絞り込んだ課題で本時を授業しているのではないでしょうか。
つまり教師が事前に「的」としたいとして指導案に書かれている課題で充分に深い授業ができているし、そういう報告も目にするところです。なのになぜ前半のぬるい活動（「一番心に響いたところを話し合おう」など）をするのだろうか？？？です。わざと「一般化された」ものを入れているのかと勘ぐりたくもなります。
協議会で的のタイミングとか言われていましたが、さっさと「どうして打たなかったの？」で話し合えればいいのにと思いました。
指導案６-４に書かれた三つの反応が出されたと仮定して、教師がその三つに対してどうしたかという協議会の方が参加した教師にも役立つと思います。今の協議会では「この発言の時に○○していたら…」というようなタラレバ発言が多い協議会に終わっていると思います。

それに、ホンマの課題が授業途中で示された時、はたして全員の子供がそれについて（自分なりに）考えられているのでしょうか。（時間的なことや内容的なことも含めて）
ある協議会での自分の経験です。
なんとかして言いたいことをまとめることができ、さて言おうか、という時に司会の先生が「それでは○○についてはどうですか」と方向を変えました。考えてきたことが言えなくなりました。ま、何についてでも何でも言える人ならなんてないことなのでしょうが、発言の苦手な者から言わせればせっかく準備できた時に変えられたらたまったものじゃない、です。

３ 「的」になる学習課題は子供の考えから生まれるのか

「私たちが追求する学習課題は、そこから生まれ、子供の真の追求課題となって浮き彫りになってくるものである」 p７

＜的とは＞ ア）子供の考えの中から生まれてくるものである。 p７

・「そうして、時を読み、満を持して子供の話し合いの渦に切り込んでいくのである」のように、どうせ教師が投げかけるのものです。ですから本時の苦し紛れの課題「父を破ったクエと違うから打たなかったの？」より「どうして打たなかったの？」の方が課題としては上質ではないでしょうか。
~~「真の追求課題は」「子供の考えの中から生まれてくるものである」は、幻想。~~

４ 近頃よく目にするペアやグループ活動について
本時では授業者が「父を破ったクエと違うから打たなかったの？」の後すぐに「グループでしゃべってみて」となっています。
ペアやグループ活動の前には、全員に自分の考えを持たせることが必要であるということを、古くは野口芳宏氏が近いことを言い、現在では堀裕嗣氏が言っています。（他にも言っている人がいると思いますが）それがなされていませんでした。（これも上の「２」の後半部分と共通するところがあります）
また、活動後の指名は活動前と同じであってはならないと考えています。

５ 児童観
「取組」には「子供の様子」が書かれているのに指導案にないのはなぜでしょう。「児童観」が書かれていないのに「付けたい力」が書かれている。
授業者は「しゃべれるけれど語れない」のようなことを言っていたと思いますが、それを詳しく書けば「付けたい力」がもっとすっきりすると思います。

６ 整理を
『要項』の中には○年目研修の資料としてのほうがふさわしく感じられる所があり、それを整理して研究主題や副主題と「的」で書き込めば良いのに。

７ 他
「魅せる」「チカラ」などのキャッチーな言葉は研究の文の中ではそぐわないと思います。
~~宇佐美寛氏なら「チカラ」と「力」は違うのですか、と尋ねるでしょう。~~